

島崎藤村 I

現代日本文学館

10

小林秀雄 編集

文藝春秋

現代日本文学館 10

島崎藤村 1

昭和四十二年二月一日第一刷

著者 島崎藤村

発行者 上林吾郎

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三
電話東京(二六五)一二一一
振替東京七八七四三

印刷 凸版印刷

製本 凸版製本

定価 四八〇円

目次

島崎藤村伝 中野好夫 3

破戒 29

家 231

解説 517

注解 506

挿画 山田申吾

年譜は「島崎藤村(一)」に収録

島崎藤村伝

中野好夫

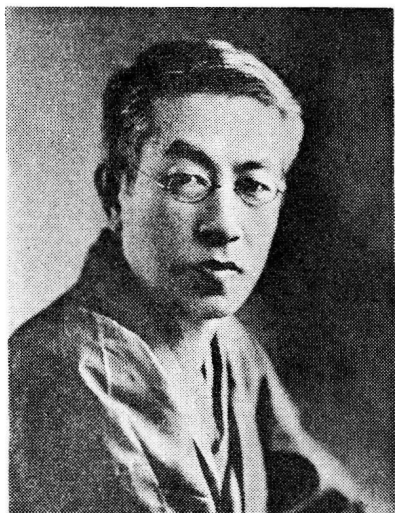
最近の若い人たちによって、どう藤村文学が認識され、評価されているか、筆者はよく知らない。もともと彼の文学は生前においても、いわゆる文壇での評価よりも、文壇以外の知識人や文化人によってより高く買われているという定評があった。これはある時期以後の藤村が、いわゆる文壇づきあいに深入りせず、むしろ超然として文壇の外に孤立の生活を守りつづけていたという事実にも関係はあるだろうし、また、彼が生活、作品の双方を通じてとりつづけていた、一種の取りすぎたポーズめく態度が、明け放し、ざくばらんすぎるほどの文壇空気に、なにかそぐわないものを感じさせた結果であったかもしれない。

だが、また一面藤村文学が、明治以後いわゆる青春の文学として欠くべからざるものであったことも疑いを容れない。だからこそ、戦前から戦後にかけても、中学、高校用の教科書に、藤村はもっとも多く採択された作家の一人だった。最近それが目立って少なくなったという統計も先日見たが、それがどういうことを意味するものか、筆者にはとても断定はできぬ。しかし戦争直後、まだ物資も不足勝ちだった時期に、当時としてはもっとも早く、とにかく完備した全集の出たのはやはり藤村であり、また四十一年秋からより完璧な編集による別の全集が刊行されている。とにかくここ近い将来における藤村文学の受けとられ方は、

近代日本文学の問題としてもっとも興味深いものの一つではあるまいか。

ところで、そういう筆者自身も明治末から大正期にかけて、その青春期をもっとも深く藤村文学の中で育ってきた一人である。研究などということでなく、読み、そして味わうという意味ならば、ほとんどその全作品をいくどかその折々にふれて読んできている。だが奇妙なことに、いままでも藤村について書いたことはほとんどない。この程度のものでもこれがはじめてである。いろんな意味でこの機会に感謝したい。

ところで本稿で要求されているのは、まず人、いいかえれば伝記を中心に書くことである。藤村の伝記関係は、ここ十年あまりの間にずいぶん新しい事実が明らかにされた。従来はまったく知られなかった「秘密」というにふさわしい事実まで、克明に研究者によって掘り起こされている。それらの「秘密」が、藤村文学を解明する鍵として、大きな寄与であることはいうまでもない。だが、それらのあるものには、後でも当然触れざるをえないと思うが、ずいぶん地下の藤村をして苦渋に顔を歪めさせるものもあるようである。藤村ほどの作者の運命として、あるいはそれともやむをえないのかもしれないが、かなり迷惑なことも事実であろう。筆者の好みからいえば、いずれすべて受売りにちがいないが、あまりそうした問題に得意になって深入りする気持はない。興味としては面白いにしても、一般読者が藤



大正11年・51歳の藤村

村文学を理解、鑑賞する上において、必ずしも絶対に必要なものばかりとは思えないからである。藤村文学の場合にしても、結局その評価の最後のところは、むしろ作者藤村が完全に消えた瞬間にはじまらなければならないことは、古代文学や古代美術などとなら変りないはずである。

第二には、周知のように、藤村は一生を通じて、多分に自伝的作家だった。主要な長篇作品はもとより、その短篇の中にも、ずいぶんと自伝的素材のものが多くことが明らかにされている。現に島崎家の一人であり、「島崎藤村の秘密」という注目すべき著書を出している西丸四方氏なども、「藤村の作品はほとんどその全部が自己あるいは島崎家の歴史である」と裏書しているほどだから、まずこの事

実に疑いはあるまい。

もっともかく言えたとて、それは藤村が「自己あるいは島崎家の歴史」を、すべてことごとくあるがままに書いているという意味ではもちろんない。作品はあくまで創作である。むしろきわめて重大な伝記的事実についてまで、理由はいろいろあろうが、ことさら筆を抑えて書いていない部分が相当にあることがわかる。たとえば後でも触れるが、相重なる父母の性道德上の過失などもその一例であろう。今日それらの秘密が明らかにされたあとになって、逆に作品を辿って行くと、たしかにこれらの秘密に関する言及とおぼしい一節は、いくらでもこれを拾い上げることはできる。だが、それらはすべて妙におぼめかして、決して直筆的には語られていない。ほとんどの研究家が見のがしていた所以である。ある意味でこれは重大であろう。

また問題は、逆の方向からも一つある。いかに彼が自伝的作家であつたからといって、作品に現われた事実、とりわけ作者の主観がはいっているに決まっている感想や意見など、主として内面史に関するような叙述を、そのまま客観的伝記と結びつけて考えることは危険であろう。ここでも作品はあくまで作品である。そこには有意識的に、また無意識的に、なにかの潤色がいっているのは当然である。信憑性というようになると、筆者は書簡、日記の類さえ、必ずしもそのまま頭から信じたくない。たしかに藤村研究家の瀬沼茂樹もいうように、「伝記を記すにあた

って、作品を利用することは、きわめて危険である。」そんなわけで、ここでは作品に現われた感慨や心境をそのまま伝記的事実であるかのように多用することは極力避けるが、といって全面的に拒否し切ることも困難である。だから、以下にもし利用することがあるとすれば、それはある程度参考のために引いたものだとして理解されたい。その信憑性の検討は、それこそがすすんで藤村に興味をもつ読者諸君自身の課題でなければならないからである。さて以上はただ前置きとして――

II

《彼は頭を窓のところに押付けて考えた。春と考えるには、自分の若い生命はあまりに惨憺^{えんたん}たるものであった。吾生^{わがせい}の曙^{あけぼの}はこれから来る――未だ夜が明けない。

「あゝ、自分のようなものでも、どうかして生きたい。」
自伝的長篇「春」の終章で、主人公岸本、いいかえれば二十五歳の藤村自身が、東北学院教師に新任されて、はじめて仙台へ赴任する汽車の中での感慨である。作品はあと数行で終わっている。(明治四十一年、朝日新聞連載のときの初出テキストによる。のち多少の訂正を加えているからである。)

いろいろな意味で引かれすぎるくらいの一節だが、わたしなどもかつては藤村得意のさわり文句の一つとして、記憶にはとどめていたが、それ以上には特に深くは考えていな

かった。だが、近年藤村の伝記をめぐるの秘密が次々と明らかにされるに、少なくとも、少なくとも筆者にはこの一節が、

また新しい別の意味をもつて思い浮かべられるようになった。自分

の一句、それは単に彼の「若い命」の「惨憺」さだけを語ったものではない。むしろ彼の宿命的ともいっていいほどの根元的な存在の問題、――少なくとも彼が一つのオブセッションとしてまで抱懐しつづけていた生の根元的意識につながっていたように思えるのである。

ある意味で藤村の一生、そしてまたその作家活動の全過



馬籠部落展望（四方木屋旅館より写す）

程ほど、彼が生みつけられた故郷の環境と伝統、またしばしば血と呼ばれている遺伝的なものによって決定的に形成されていた作家もめずらしい。ときには藤村自身、みずからそう信じることによってふりまわされていたくらいさえある。そんな意味で、まず環境、遺伝という問題について、少し枚数をとって述べておきたい。

藤村島崎春樹は明治五年（一八七二）信州木曾路、馬籠に生まれた。父は「夜明け前」に青山半蔵として描かれる正樹。夭折の女二人を含めて四男三女の末子だった。

まず最初に馬籠という故郷について。これは「夜明け前」冒頭の叙述によって、ほとんどあますところなく描かれているが、つい最近もこの村が長野県か岐阜県か、その帰属問題で大めにもめ、週刊誌の話題まで賑わしたくらいだから、記憶の向きもあるかもしれないが、名古屋から国鉄中央線を東に向かうと、なるほど実に微妙な県境にある。落

合川駅から一路のぼりを東に指すと、旧中仙道、あるいは木曾街道と呼ばれた石畳み道（現在もそのごく一部は残っている。ただし自動車道は別に新しく開けている。）を四、五キロばかりで馬籠に着く。あとさらに一キロばかりをのぼると馬籠峠。急に展望が東、木曾福島の方角に向かって開ける。いわゆる旧木曾街道十一宿のはじまりである。

木曾路については、「木曾路はすべて山の中である。あるところは岨（きざ）づたいに行く崖の道であり、あるところは数十間の深さに臨む木曾川の岸であり、あるところは山の尾をめぐる谷の入口である。一筋の街道はこの深い森林地帯を貫いていた」にはじまる「夜明け前」冒頭の描写であまりにも有名になってしまったが、ただし、馬籠の場合は美濃路からするトバ口の意味もあって、必ずしも上のような景観ではない。むしろ美濃側には意外に明るい眺望が開けて、決していわゆる森の中、谷の底というものではない。

父 島崎正樹



母 島崎縫子



だが、そのかわりに傾斜はかなりひどい。ことに小さな宿場町そのものが、まるで虫が斜面にでもしがみつくように、急な勾配道を挟んで並んでいるのがめずらしい。かつてはこの街道の左右に「石を載せた板屋根」が並んでいたのだろうが（いまはほとんど瓦屋根である）、たしかに貧寒のさまは蔽（おほ）うべくもない。維

新後まもなく、島崎家などもその一つだが、豪家が多く時代に敗れて没落して行ったのも不思議でない。

だが、それでいて半面重大なのは、この貧寒な山の中の宿場町が、いまならさしずめ国内交通の大幹線、大動脈に沿っていたという事実である。単に徳川三百年間、参勤交代の要路だったというばかりでなく、とりわけ幕末から維新への大変動期にかけては、時代の激しい変化の波が、実に敏感にこの山村のアンテナに受信されていたことになる。たとえば例の和宮降嫁、水戸天狗党残党の逃亡行、中仙道鎮撫総督の東征、明治新帝の巡幸等々、そうした意味深い時代の動きを、すべてこの山村の人たちは、目のあたり直接身をもって感じていたのだった。

そんなわけで単に地理的条件だけからいえば、ほとんど決定的に小さな閉鎖社会に運命づけられていたような古い山村が、他面にあつては、とうてい適応にたえきれぬほどの新しい波に、直接肌をもって触れていた。いわばこの矛盾、この事実が、村でも旧特権階級の最大のものであった島崎家の子藤村にとって、なにかの運命的因子にならないはずはなかった。家、そして血といったような旧い封建的重荷の下に一生苦しまなければならなかったいわゆる藤村の固執観念と、他方ではもっとも早く西欧文学の新風に触れて、新しい目ざめを経験した開明的要素と、この矛盾した彼の運命が、果してこうした故郷の出自と無関係であつたらうか。



藤村（春樹）上京当時の記念撮影 前列左より二人目、春樹、高瀬親夫、三兄友弥 後列左より長兄秀雄、義兄高瀬薫、二兄広助

旧特権階級と書いた。島崎家は代々馬籠の庄屋、本陣、そして問屋を兼ねていた。小さなこの地域社会では、もちろん特権的支配層である。しかも島崎家の祖先は、永正年間というから、遠く足利時代の末期になるが、すでにいまの神奈川県三浦半島から移り住んで、木曾氏に仕えた武将であつたという。藤村の父正樹は伝えて十七代である。こうした小さな閉鎖社会での特権的豪家といえ、当然長い間には同族、近親の結婚も重なっていたかもしれない。そこにもある意味で、いわゆる濃んだ血の存在は想定できるかもしれない。そういうば藤村の同胞は、ちょっとしたカラマゾフ兄弟をさえ連想させる。彼等のことは、あまりにもくりかえし作品の中に現われるから詳述は避けるが、まず名



明治学院在学当時（明治21年）

篇「ある女の生涯」をはじめほとんどの自伝作品でもっとも深い愛情をもって描かれている長姉園子、——若くして自殺を企て、嫁いでは夫の放蕩に苛みつくされ、最後はその病毒を受けて（？）脳病院で淋しく死んで行く園子。

次は長兄秀雄。最初こそ故郷で地方政治家にかつがれてはいるが、三十近くになって上京、いくどか虚業に近い事業に手を出して失敗、ついには二度まで刑余の人になる。最後は一応成功しているようだが、とにかく一生ひどい浮沈をきわめている。故郷の産はすべて失い、若い弟藤村にさえ一家の生活の負担をかけるほどだが、それでいて旧豪家の家長ぶりがなんとしても忘れられない男。

さらに次兄広助。幼にして母の実家、これも別の島崎家を継いでいるが、覇気、豪放といえは聞こえはよいが、ま

て、ほとんど家は顧みない。これも浮沈はひどく、家族は陋巷に沈溺しているというのに、自分はひとり旅館で豪勢な見栄をつくっていたようなこともあるらしい。晩年は悪病からほとんど失明して死んでいる。が、いずれにしてもこの両兄が、およそ文学などは解せぬ俗世界の人間であったことは注目に値する。

三兄友弥については、すぐあとで触れる。

だが、これらの事実よりも、さらに重大なことは、主として戦後明らかにされた父母両親の秘密である。それについては、さすがに自伝作家の藤村もついに明らさまには書かなかつたし、筆者自身もあまり興がって書く気はない。だが、なんといっても今日藤村文学を理解するには、いわば無視できぬ鍵ともいふべきものになっていることは事実なので、ごく簡単に書くことにする。一つは父正樹と異母妹由伎との近親相姦であり、いま一つは母縫子がかりそめの密通を犯して上記三兄友弥を生んだことである。いずれも父母三十代での事件らしい。由伎は正樹の父重留に嫁いできた後妻桂子の生んだ四歳年下の異母妹であった。この異母妹との近親相姦がいつからはじまり、いつまでつづいたかは詳細にしない。だが、その正樹が「しげりあふ夏山のまにゆく水のかくれてのみや恋ひわたりなむ」をはじめかなりの数のおだやかならぬ恋歌などをのこしているところを見ると、ただ、かりそめとはいはいかねるかなりの長い交情だったのではあるまいか。母縫子の過失もこうした状

況の中で起こったらしい。正樹が例の憂国勳皇のことで家を外にして飛び歩いている留守に、近隣の某と通じて明治二年友弥を生んだというのである。

前者は、いうまでもなく「新生」第二部百三十五で、民助（長兄秀雄）が岸本（藤村）に向かって言う、「今迄誰にも話したことのないという父の生涯に隠れたもの」である。「あれほど道徳をやかましく言った父でも誘惑に勝てなかったような隠れた行為があつて、それがまた同族の間に起こつて来た醜い出来事の一つ」とあり、さらに「父の道徳上の欠陥が末子の岸本にまで伝わり遺つてゐるのを悲しむかのような口調で言つた」と、ほんのさりげなく触れられてだけいるのがそれである。が、縫子の過失にいたつては、暗示に近いものさえ作品にはない。友弥が兄弟中の変り種であつたらしいことは事実だし、「家」などの作品に出る宗蔵（作中名）は明らかに彼がモデルである。疎んじられるというよりも、むしろみずから疎んじられる形でぐれてしまひ、やがて廃人同様になつて兄実（秀雄）の家にころがりこんでくる。そして「皆から厄介者に思われて……食わしてくれば食うし、食わしてくれなければそれまでさ」とまるで自棄的であり、実もまた「兄弟に憎まれれば損だがナア」と溜息をつく。それでいて佐佐木信綱の許に出入りして和歌をつくつたり、同胞中で一応文学の話などのできるのはこの友弥だけである。だが、かく余計者だからといつて、それだけで不義の子と察しられる読者はまずあるまい。

藤村のいわゆる「自分のようなもの」ということの背景には、ここまでのものがあつたはずだ。それでもとにかく「どうかして生きたい」という苦悩と執拗な努力とが、よきにつけ悪しきにつけ、藤村五十年の文学生活ではなかったのだろうか。それにしても藤村はこの父母、とりわけ父の亡霊を、半生ほとんど異常なまでに悩みつづけている。もちろんその頂点に達するのが「新生」の問題だが、それはまた後で多少触れる機会もあろう。

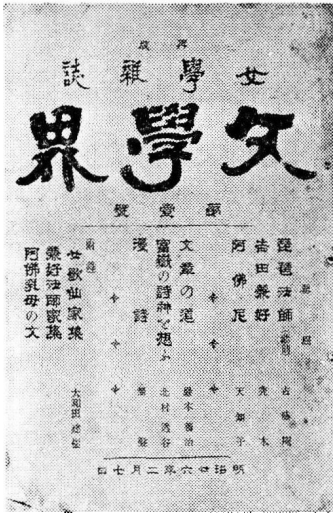
だが、ここで思うのは、筆者も四国の田舎で育つたものだが、古い土着の豪家などの濃んだ血の中では、異母妹との近親相姦とはいかないまでも、藤村両親の過失に似たものは、たいした罪の意識もなく、かなり広く行われている。事実を耳にした記憶があるように思う。普通とはいわないまでも、決して珍しいことではなかったはずだ。しかしそれらは決して執拗な罪の苦悩などは伴つていなかった。現に父正樹にしても、上にも引いたような、あまり上手でもない恋歌をのこしているだけで、少なくとも藤村のような罪の苦悩は一向に示していない。藤村にとってだけ一生の負債になつたというのは、やはり彼が、キリスト教とまでは断定できないにしても、少なくとも早く西欧道徳に目が開かれたからではなからうか。

III

さて藤村の伝記に急ぐ。こまかい事実は年譜にゆずると

して、ごく大まかに展望することにするが、明治十四年十歳のとき、兄友弥とともに東京に出されて、少年時代がつづく。父から漢字などの手ほどきも受けてはいたが、小学校は途中転校である。なぜ東京へ出したか。長姉園子の夫高瀬薫が東京へ出て小学校長をしていたので、寄食の便宜もあり、学問好きの少年藤村を出してやったというのも、一応表面的の理由ではあるうが、ようやく馬籠の家も傾き出し、それが東京遊学を促したということもある。またさらに、一家の道德上の乱れを知っていた長兄秀雄の發議で、その悪影響のおそれから切り離したという一説もあるが、あるいは当たっているかもしれない。

それはともあれ上京した少年藤村は、その後まもなく（翌十五年）高瀬家が郷里木曾福島に引き上げたために、縁故をたどって他人の家に寄寓し、とりわけ義兄高瀬との同



「文学界」第一号の表紙。藤村は古藤庵の筆名で劇詩「琵琶法師」、無声の筆名で漫詩を掲載

郷人吉村某の家には、その間断続はあるが、明治二十七年二十三歳の初夏ごろまで世話になることになる。こうした他人の家での生活は、少なくとも藤村自身によると、「周囲の冷淡な人達に対して自分の少年らしい感情を隠す」性癖、そして「いかにせば……性急で気むずかしい人を喜ばすであらうかと、そんなことに心を砕く」性格を養ったと後年の回想にある。（「生い立ちの記」など）これは藤村およびその文学を考える上にはたいへん興味がある。だが、ただ筆者は、果して後年まで彼の特長であった一種のボーイズ、感情の流露をそのまま出すよりも、隠すとはいわぬまでも、つねに物の焦点の周囲だけをめぐって、妙に思わせぶりにおぼめかす藤村独特の生活態度およびその文学上の表現が、回想通りこの他人の中の寄寓生活のせいかな、それとも生来のものか、簡単に断定はできないように思う。

それはとにかく主として吉村家に入ってから、一方では漢学なども学びながら、他方では英語を勉強しだすことになる。そして明治学院というミッション・スクールに入學することになるのである。後でも触れるが、これはかなり決定的な曲り角だったと思う。なお自分の読書で日本文学にも親しむが、とりわけ芭蕉への親炙は見のがし難いであろう。およそ後年まで藤村の文学ほど「旅」という観念の頻出するものもめずらしい。藤村文学の大きな主題は旅である。本集の「家」に出る「俺の家は旅舎だ——お前（妻冬子のこと）は旅舎の内儀（うちぎ）さんだ。俺か。俺は……旅の客

サ」という一節だが、これが明らかに芭蕉からの発想であることは別にしても、果して人生即旅のこの思想を、芭蕉が彼に吹きこんだものか、本来彼の中にあったあるものが、たまたま芭蕉の考え方に密着させたものか。おそらくは後者であつたのではなからうか。

青年藤村はまもなくキリスト教の受洗をする。のちにまもなく棄教することになったが、筆者は特にこのことを重要視するつもりはない。筆者自身ややられて同じ経験をしているから言うのではないが、明治の若い文学者のキリスト教入信などは、本来の福音的信仰からいえば、ごく少数を除いては大した問題ではない。気分的といつては言い過ぎかもしれないが、むしろ明治期開明文化の側面から見るべき問題だろうと信じている。あちこちの章句などを引いて藤村のキリスト教思想などということ論じるのはやさしいが、厳しい信仰的意義からいえば、決して大したことではない。筆者の読むかぎり、あえて言うが、藤村にしても例外ではない。

それよりもやはりはるかに重大なのは、ここで馬場孤蝶、戸川秋骨などを知り、さらに明治女学校教師時代になって、北村透谷、上田敏などを知り、いわゆる「文学界」グループの形成にいたることである。のちに「遂に新しき詩歌の時は来りぬ。そはうつくしき曙のごとくなりき」（藤村詩集）序と高らかに歌い上げる明治近代文学の夜明けは、おそらくこれなしにはあの時期に、あの形で起こることはな



26歳、第一詩集「若葉集」刊行のころ

かつたろうからである。因に、藤村的な、あまりにも藤村的な題名の自伝長篇「桜の実の熟する時」は、この明治二十三年の初夏から二十五年末ごろまでの精神史を扱っている。十九歳から二十一歳である。

が、これより先き彼は、「女学雑誌」などで文筆の活動をはじめている。だが、明治二十六年一月、その「文学界」創刊と同時に、ほぼ九カ月にわたる関西漂泊の旅というのがある。九月岩手県一ノ関への旅を最後に、また東京に舞いもどるが、これが長篇「春」の素材になる。この漂泊が明治女学校生徒佐藤輔子への悲恋によって触発されることは周知の事実だが、女性関係についてはいずれあとでまとめるから省略する。

さてここでふたたび年譜にかえる。明治二十七年（二十三歳）には漂泊を終えて明治女学校に再就職している。五



新婚当時、小諸にて 後列左より書生、岳父秦
慶治、藤村 前列左妻冬子、右義妹秦たき子

月には北村透谷が縊れて死ぬ。詳論の余裕はとてもないが、これは藤村自身にとっても一つの大きな画期的衝撃だった。そうかと思うと、長兄秀雄の第一回下獄があり、故郷の本陣屋敷も売却、一応一家は完全に没落する。兄一家の負担までが藤村の肩にかかってくるのである。「春」によると、このころ藤村が陶画を試みる話が出る。作品のかぎりでは手間代のことなどまったく考えず、いわば一種の芸術的空想を求めてやったことになっているが、西丸四方氏の「秘密」によると、明らかに賃内職のためだったとある。また作品では、一日でこりてやめてしまうことになっているが、これも西丸氏によると、家で内職にやっていた。ただあまり手間賃が安いのでまもなくやめてしまったという。おそら

く一族の中ではそう考えられていたのであろうが、果していずれが正しいのか。

明治二十九年（二十五歳）には東北学院教師として赴任することになる。やはり生計のためである。（ついでにいえば、「春」は上述漂泊の旅からこの仙台赴任までを扱っている。二十二歳から二十五歳までのほぼ三年間である。いわゆる「文学界」運動の内面史を語る貴重な資料であるばかりでなく、後半の青木、すなわち透谷の死は、作品圧巻の部分である。）

仙台滞在は一年足らずにすぎないが、はからずもこれは日本近代詩歌の新しい曙になった。「若菜集」になる詩篇がぞくぞくとして成ったからである。文字通り「心の宿の宮城野」であつたのである。藤村の創作活動はまず「文学界」創刊号（明治二十六年一月）に載った劇詩「悲曲琵琶法師」あたりをもつてはじまりとするのが定説である。詳論している暇はないが、結局は習作の域を出ず、措辞もまたとても新風とは言えなかった。その意味では「若菜集」収載のものは、いわば突如として鉾脈を掘り当てた観がある。そして以下「一葉集」、「夏草」、すでに小諸時代になっているの「落梅集」にいたるまで、のちに「藤村詩集」（明治三十七年、三十三歳）にまとめられる詩人時代がはじまるのである。

鉾脈を掘り当てた、と書いた。だが、詩形はほとんど七・五調を主としたもので、決して新風とはいえないし、



小諸義塾の教師藤村（後列左端）

用語もまた案外に古風で、むしろ常套（じょうそう）を思わせるものさえある。にもかかわらず、その組合せにおいて、たしかにこれは藤村を措（お）いてほかに見られない新鮮な情感と溫柔の官能を盛（も）るいわゆる藤村調の詩感を出すこと

に成功した。きわめて日本的な定型と措辞が、見事に従来の日本詩歌には見られぬ種類の新鮮な情感（やはり西欧的なといつてよいのだろうか）を表現することに成功した。

魔術（まじつ）といえは魔術である。

だが、同時に見のがしてならないことは、詩のイメージを端的に、直截（ちてつ）にとらえるよりは、いわば核心をおぼめかしてのソフトフォーカスの効果、いわゆる藤村調を一応完成して、やがては彼の散文スタイルにまでおよぶスタイル

ルを定着させたことも事実である。ある意味ではきわめて日本的なもので、それがにわかに藤村詩を人口（かたぐひ）に膾炙（たいし）させたにはちがいないが、そのまま裏返せば弱点でもあった。率直にいつて今日から見れば、日本近代詩として、とうてい蒲原（はら）有明（ありあけ）や高村（たかむら）光太郎（みつたろう）や萩原（はぎはら）朔太郎（しゅくたろう）などの上位に評價（ひやうか）することは無理であろう。つまり口当りのよい割に、醒めてみると案外薄手（うすて）なのである。一篇の実例も引かないで独断的に論じることの不当なのはよくわかっているが、枚数の関係（かんけい）もあり諒（しょう）とされたい。

しかし詩人としての成功にもかかわらず、単なる抒情は、結局藤村の本領でなかった。「夏草」のあたりからすでに詩風の変化を示しており、長詩「農夫」、「労働（ろうどう）雑詠（ざうぎよ）」など現実的な人間臭（にんげんくさ）が濃厚になる。そして「あゝ、我が胸には二つの魂（たま）ぞ棲（す）む」とか、「吾（わが）胸の底（そこ）のこゝには言いがたき秘密（ひみつ）住（す）めり」と歌わなければならないのは、もはや定型詩の枠（わく）をこえて、散文でなければ表現しえないものに逢着（ほうちゃく）したわけであろう。「落梅集」を最後に未練（みれん）気もない詩との訣別（けつべつ）になるのである。

IV

藤村二十八歳。明治三十二年長野県小諸の小諸義塾の教師として赴任（しゆにん）する。そしてほとんど同時に秦（はたけ）冬子（ふゆこ）と結婚している。小諸在住は以後三十四歳の三十八年までまる六年におよぶのだが、その間三女が次々と生まれる。それは詩